

女の舌

松本しづか

今夜の主演は私、山路容子にございます。つまり黄泉の国へ旅立つ私のためにご参集下さった皆様とのお別れの通夜なのでございます。

日中の暑さを引きずったまま夜になっても気温は一向に下がらず、お気の毒に皆様は汗で手放せないハンカチをしきりに額や顔に押し当てて、げんなりしていらっしやいます。読経の中遠慮がちに取り出した扇子で、そっと仰いでみても却って暑さが増すようでした。私と致しましては本当に申し訳なくて。

でも、建前とは別に本音を申し上げますと、こんな窶れた顔など皆様にお見せしたくはないのです。私は彼方に旅立つにはまだ早い五十二歳でございます。見かけはどちらかと言いますとマニッシュで、卑近な例で申しますと、米倉涼子張りの自他共に許す美人でございます。まあそれなりのプロポーションで自己満足を致しております。

寒い冬も今ふうに、ノースリーブで居りましたので、「あら、山路さんお元氣ねえ、お寒くないの？」

「そう、まだ若いから」

なんて、多少無理して若振って笑って応えたりしてりましたが、私自身肺を癌に蝕まれていたなんて全く気付きませんでした。僅か二週間の闘病生活でございました。

私は窮屈な白木の柩の中で、胸に六文銭を入れた頭陀袋を掛け白装束に草鞋履きという旅姿で、私の意志とは関係なく残酷にも人々の前に曝け出されて、醜く病み疲れた青白い顔にはうつすらと紅を塗られておりました。唇はやや開いていて、お愛嬌に微笑んでいるかのように見えるようでしたが本当は薄気味悪くて嫌なはずでございますのに、「まるで眠っていらっしやるように穏やかな優しいお顔で」

「山路さん！ 大変だったわね」

「お辛かったでしょう？ よく頑張ったわね」

とそれぞれお声をかけて下さって、中にはいかにも演技と見える空涙まで浮かべて下さったりして、たとえそれが演技やお義理と解っていてもそれはそれで確かに有り難いことには違いありません。でも嬉しい反面正直申して迷惑でもございました。

「容子さん！ こんなに冷たくなっちゃって……」

私の頬に手を当ててハラハラと涙を流して下さっているのは、親友だと常日頃言っていた小山多喜子さんです。へいともありがとう、生き上手な貴女にはいろいろ

教えて頂きました。貴女の人生哲学と言ったらいいでしょうか、一言一言感心して伺っておりました。その私に、

「貴女はほんとに生き下手な人ね、いくら尽くし型だつてそればかりでご主人と向かい合っていたら駄目よ。そんなの男性を増長させるばかりで面白くもないし退屈で、それより甘え上手になって男心をくすぐってごらんなさい。後ろを向いて舌を出していてもいいのよ、貴女のようにお嬢ちゃま奥さまで澄まし屋さんで居ては駄目なのよ、男性の方から跪いて下僕になってくるように仕向けなくちゃ」

「へー、そんなものかしら」と私は貴女の一言一言に頷いてはいたものの、性格的なものも有ってやはり私は可愛いい女にはなれませんでした。

「もって甘え上手になりなさい、そしたら美人の貴女に更に花丸が付くわよ」

私が貴女の強かな男性操縦術に舌を巻いていると

「甘えられたら男は何だつてしてくれるわよ。その方が得でしょ？ つまらない自尊心のために損をすることなんかないじゃない」

左様ご尤もでございます、と何時も貴女のご高説には脱帽しております。

皆様の会話は一応ヒソヒソ話のつもりなのでしょうが、私の耳にも届いてまして、

「彼女随分やつれちゃったわねえ、あんなつたら美人もお終いだわね」

「私だったらあんな哀れな姿人様の前に曝したくないわ」

「私も絶対にいやだわ」

「彼女美人だからって、今までのいい気になりすぎていたんじゃないの？ 小山さんから聞いた話だけど、かなりのご乱行だったみたいじゃない」

「私も聞いたわ、あんなに山路さんと親しかった小山さんのお話だから本当だと思うのよ。ボーイフレンドが三、四人いてお出かけの時はその都度お相手が違うんですって」

「そのお話私も小山さんから聞いたわよ」

「え？ それって小山多喜子さん、貴女のこと？ それはあまりにもひどすぎやしませんか、貴女ってそんな有りもしない出鱈目を言う人だったの、何の恨みがあつてそんなことを、何時も私のことをブリッコだつて冗談っぽく言っていたけど、なにかにつけて目障りだったのかしら、私は貴女が親切にいろいろ教えてくださつてと、いつも心底有り難いと思っておりましたのにその貴女が……信じたくないけれど、もし本当だったら貴女って本当に怖い人！ 私に教えてくれたように多分、今貴女は後ろを向いて舌を出しているのでしょうね」